会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和５年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業  （２）教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第2回専門学校教員概論研修プログラム開発委員会 |
| 開催日時 | 令和5年9月21日（木）15:00～17:00 |
| 場所 | 学校法人麻生塾 |
| 出席者 | 事業責任者：岡村　慎一、成底　敏（OL）　　　　　　　計2名  委　　　員：植上　一希、松田　義弘、佐藤　昭宏、丹田　桂太、  佐藤　善邦（OL）、水田　真理（OL）、小田　茜（OL）、  小田　政江　　　　　　　　　　　　　　　計8名  請負業者　：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　計1名  　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計11名 |
| 議題等 | １．本日の目的  　専門学校新任教員研修調査の計画案の検討  ２．専門学校教員概論研修プログラム開発委員会の事業計画と調査計画（植上）  （1）事業計画の確認（令和5年度）  ・配布資料を基に説明。（植上）  （2）調査計画の確認と前回の委員会での議論  ・配布資料を基に説明。（植上）  （3）三菱総合研究所との連携について  ・配布資料を基に説明。（植上）  ・私たちの調査の外枠等（とくにマクロデータ）に関して、三菱総合研究所の質的調査・量的調査を適宜活用することで、私たちの調査の焦点を絞ることができ、効果的に実施することができる。    （4）調査計画案の再提示  ・配布資料を基に説明。（植上）  ――――――補足・意見交換等――――  ＜補足＞  ・三菱総研と打ち合わせをしたときに、今植上さんが言っていたように、私共の全専研がやる調査と三菱総研がやる調査が似たような内容をするけども、区別ができるようにしておきましょう、ということ。それは、予算的なこともそうだし、だから報告書でどっちが調査したのかがよくわからないようになってくると、それはまずいよね、文科省としても。お金をどういうふうに出してるんだ、ということになってしまうから、そこは整理しておこうねって話をしてもらった。なので、今回の三菱総研井おける実施済みのインタビューは、まさにこの文字通りで、三菱総研でやっている調査をしましたよ、と。ただ、この調査データについては、あくまで三菱総研なので、植上さんという属人的なところが間に入っているけど、その調査報告は、今年はうちには入れないで、来年度以降、文科省に発表してもいいよというところから、私たちが参考にする、内々には参考にしますけど、ということ。頭に入る人は同じ人が入るから。そんな感じになるだろうとというところで、質的な内容について区別して運用しようかね、ということになるのかなと私は認識している。（岡村）  →この間、私の方でも認識が甘いところがあったので、岡村先生や飯塚さんにご心配おかけして、また、いろいろなご助言いただいたが、最終的にはこういった形で行けば、三菱総研の方でも問題ないだろうということになっているので、そこは了解してもらえればと思う。また、今岡村先生から補足してもらったように、このグループの最大の目的は、教員概論の研修を作るということと、テキストを作るということで、調査に関しては、補助的な位置づけになっている。もちろん今回も報告書は作るが。なので、この教員研修プログラムが最終的に出来上がるのが、令和7年度になるので、今年行った三菱総研の調査も、来年度のプログラムに活かすということで、十分対応が可能かなと思っているので、その辺も問題ないかなと思っている。三菱総研さんは非常にパワーがあるので、人的なパワーがあるので、そういったところにうまく頼りながら、特にアンケート調査の方はあちら側に頼りながらやっていくのがいいかなと思っている。ただ、一方で、後で丹田さんが言ってくれると思うが、やっぱり三菱総研の調査はすごく大きな調査、ざっくりとした調査なので、この前もTCE財団に調査しに行ったが大きい調査、大きい話を１時間したので、肝心な新任の話とかは、正直10分程度しかお聞きできなかったということもあったので、この詰めみたいなのは、私たち独自で、東京に出向いて聞いていきたいと思うし、また、昨日も福専各への調査も丹田さんが参加してもらったが、やっぱり深堀の調査を独自でしていかないといけないかなと思っているので、ここをしっかり焦点を当ててやっていきたいなと思っているところ。（植上）  ２．具体的な調査計画・質問項目について①：TCE財団等へのインタビュー調査（丹田）  ・配布資料を基に説明（丹田）  ――――――――補足・意見交換――――  ・まず私の方から１つ補足として、TCE財団、そしてまた福専各になぜ調査をするのかって言った時に、狙いとしてあるのは、大きく外的な事項と内的な事項に分けれるかなっていうふうに思っている。繰り返しになるが、私たちの今回の事業の最終的な着地点は、教職概論のプログラムとテキストを作るということになる。で、それを作るために外的事項と内的事項のデータが必要だというふうに考えている。内的事項っていうのは、もうシンプルに、どういうような内容を作ればいいのかっていうような材料集めたいっていうこと。外的事項というのは、逆にこういうことがされてないから、こういうテキスト必要ですよねっていうような、データを集めたいっていうようなことになるのかなというふうに思っている。TCE財団、そして福専各、特にTCE財団に聞いていく際に、多分、外的事項が若干集まってっきそうな気がしている。特にやっぱり13都道府県にしか実施されていないということを考えると、いろいろな先生方に新任教員研修を、TCE財団としてまず届けることができていないっていうことがわかることになるし、また、いろんな問題、問題というか、難しさがあるっていうこと、またプログラムの立て方も、やや課題があるということはTCE財団の話でもいただいているので、そういった中で、今のニーズに沿った形で、より広く届けるために、テキストとかプログラムっていうのを作っていくっていうような外的事項とデータをTCE財団調査から得たいというのは、正直なところになっている。もちろん、TCE財団に配慮、配慮というか、しっかりと丁寧やりながら、TCE財団の欠点になるような話をするつもり一切ないが、うまくその辺を表現しながらやっていければというふうに思っている。一方、今回、福専各を1個選んでるっていうところは、TCE財団の調査の中で、TCE財団自身が、福専各が各専各の中で1番珍しく新任と中堅研修をしっかりとやってるっていう発言があったっていうところも1つ大きいかなっていうふうに思っている。実際、岡村先生もいろいろ講師で呼ばれていると思が、私も新任教員研修、もう4、5年前から、講師担当しているが、やっぱり福岡の専各さん、すごく一生懸命、事前の打ち合わせとか、その辺も練られていて、体系についてすごく考えられて、まあ野口さんが考えているんだけど、考えられてるなという印象を持っている。 先日の委員会で、北海道とか大阪とか見たほうがいいんじゃないかってご意見いただいて、その通りだなと思いつつ、文科省の予算の関係とか、こちらの人的な労力のことを考えていったときに、まず今年度は、福専各に焦点を当てて、福専各がどういうことをやってるのかっていうところを見ていくことで、外的事項のみならず、内的な事項、新任の教員研修プログラムでどういうようなアイデアが必要なのかみたいなことを、担当者の方からもしあれば聞ければいいのではないかというのがアイデアになってるところ。そういった形で、TCE財団調査、そして福専各調査を改めてちょっと設定し直しているので、そういった形で、それで多分、丹田さんにも調査項目を設定してもらっているが、そういったことをちょっと話しながら、進めているので、補足説明として説明させてもらった。（植上）  ・もう繰り返しになるかなというふうに思うが、私も初めてTCE財団のお話伺って、今現状どういうラインナップを想定されているのか、令和6年段階でどういうラインナップにしようと思われているのかっていうことの、全体像を伺えたところが大きかったところと、あとは、研修を実施していく上での制約の話が私は興味深かったなと思っていて、お金の問題、張り付いている事務局の人の数の問題、その制約を考えた時に、現実的にどういうことができるのかっていうことを結構考えていかないといけないかなっていうところが、すごくこの事業で研修していくときのキーポイントになってきそうだなって思った。で、まだわかってないのは、さっきの話もあったが、新任教員のところはそんな手厚く取れてないが、とは言え、今貼られている中でも中堅段階で、例えば分かりやすいところでいうと指導力向上とか、学生対応とかが出てくるが、小中学校とか高校現場での仕事とかしてると、中堅でいいのか、というか、新任段階で結構押さえとかなければいけない知識の問題とか、あと最近の不登校絡みでいうとゲームの依存とか、その生活習慣そのものをどのように成立させていくのかみたいな問題とかっていうのを、下の学齢とかで出てきたりするわけで、なんかそういうマイナーチェンジされているけれども、新任段階で押さえなければいけないものとかって、場合によってはあるかもしれず、なんかそういう、今、先生たちが直面している教育とか、学習課題に照らしたときに、どういうコンテンツが必要なのかみたいなことを、まず課題解決の側面から新任教員に必要なものってなんだとかっていうことを、これから情報取りながら考えていけばいいんだろうなあって思ったことが1個。とあともう1個、まだこれは取れてなくて、この会議の中で言われた事だが、教員養成も大事なんだけれども、そもそも教員確保に困っているみたいな問題がミーティングの中で意見してもらった時に、専門学校の先生としてどうか、だけでやっぱり考えちゃだめなんじゃないって話が出てきて、そこが凄く重要なポイントだというふうに思っていて。丹田さんの項目の中でも、キャリアイメージいう話があったが、どういう広げ方をして行くと、その専門学校の先生だとか、先生としてのキャリアもそうだし、それ以降のそれ以外の展開も含めて、ここで働いていくことの意味を持ってもらえそうなんだとかって。なんか今日、午前中に植上先生と、地域人材育成の高校との連携の中での専門学校の先生の役割とかっていうこともちょっと出ていたが、なんかこういう活躍の場があるっていうか、ほかの学校種の先生よりもこういうところで秀でているみたいなところとかを、ちゃんと伝えることによって、それ以外のキャリアの道とかも考えてもらうこととか。ちょっとまだ今は展望レベルだが、初回のミーティングを受けて、何かしら、最終的な着地点として、プログラム開発につながる上で重要な情報を聞けたかなと思う。私もできる限りこの会議、調整して行ければと思う。（佐藤）  ・もう聞かれていると思うが、TCE財団って一応、予算事業って文科省の方から補助がでるという立場ではあるが、今年度、9月に一応、全専各、全国専修学校各種学校総連合会とTCE財団との連携についてっていう話し合いがされて、文章が出ている。それが何かというと、もっと研修しろ、という話が会長から出た。ぶっちゃけここだけの話、それまで会長は、研修いらないんじゃないか、赤字だから、という話だったが、飯塚さんが良く知ってるように、このTCE財団って、もともと教職員の研修をしようねっていうところで集まって、文科省から補助事業として研修の経費に関して補助するからねっていう話になって、出している。だから、この新任教員研修も1000万ぐらいもらってる。で、実際は各都道府県13個の県で今回470万ぐらいの売り上げを上げて、それよりも倍の資質（？）がないといけないよっていう、そういうルールであって。だから都道府県にとっては、赤字出すためにあるんじゃない、みたいな話になる。で、それは会員校さんから金をもらわないとやっていけない。それか、都道府県が今回特別交付税あるから、特別交付税で研修をやったらそれ経費を補助するよって言っても、山口県なんか1個15万円だからね、これじゃ研修費の比にもならないし。そういう実態ある。だから外的要因からすると、そういうフレームで、今、TCE財団がやっているっていうところが、まずあるので、そのお金の処理で一生懸命っていうところ。これちゃんと特別交付税でも新任教員研修もまかなってもいいよって言うけど、もう文科省は新任教員を除いて、特別交付税ねっていう話で今きている。そうじゃないと、二重に交付するみたいなことになるから、みたいな。研修はいいんだけど、新任教員がダメよみたいな。ではこれは提言していかなきゃいけないなと正直思っている。だから、そういうところがある。それで、今年、その13都道府県で昨年が400人ぐらい、全国で。福岡で40人。専門学校、福岡県で新任って何人おったっていう話。麻生でもそれくらいおるんやないって話。実際がもうできてないわけ、新任教員研修やってるところでも、みんなが入れてるわけじゃなくて、途中採用とかでやりくりしてるから、こういう現実の実態をちょっと見ないと、生々しさが出てこない。つまりどのぐらい採用してるんですか、で、それでどれだけの新任教員研修を受けさせるんですか、みたいなものが見えてこないと、今回うちがやろうとしているこの教材が、なぜ必要なのかって言うところの裏付けになるんじゃないのかなと。それが植上さんの思いじゃないかなと。で方や、競合として、都専各が今、吉本先生が出そうとしている教材がある、eラーニングで。それからもう1つ、カワグチ先生がやられてるところの文科省授業で、今回のSlackにあげたところで、eラーニングで、なんとか専門士みたいな作ってるプログラムがある。こういうところとの整理を、やっぱり文科省の方に区別として言えないといけないので、私らeラーニングこれできるようになってるからね、履修証明とれるように星槎大学でやれるようにしてるし、みたいなところを向こうは言ったりとか、吉本先生は東京でやってるんだから、これを使いなさいって、言ってくるだろうし、この辺りのせめぎ合いをどう説明に付けられるかってところ。だから読み物的にやれるっていうのは、私は意味があると思うし、それを使って各地域で、グループでオリジナルなことをやってくださいねっていうのは、もう70過ぎた先生方がこうやってる研修がいっぱい新任研修としてある中で、いいんじゃないのかなと思ったりしている。言いたいことはいっぱいあるが、このあたりで。（岡村）  →今、本当に岡村先生から話してもらったように、やっぱりこのテキストで最終的に作っていくってことがあったときに、外的事項として、やっぱり届いてない。あと、現実として、制度的、この前TCE財団に話を聞いて、TCE財団もめちゃくちゃ頑張ってるなってことはすごい伝わってきた。きたけれども、やっぱりそれでもいろんな制度的な問題とかがあって、なかなか多くの先生方に届いてないっていうところが、やっぱり課題感であるので、三菱総研がやっていた調査とかも、過年度でやってきた調査とかも合わせると、まず届いてないっていうことは言っていけるんじゃないかなと思う。また、一方で、本当に岡村先生がおっしゃったように、他の類似のそのプログラムとの差別化っていうところに関しては、やっぱり内的事項の調査が必要になってくるっていうふうに思っていて、そうなった時に、例えば福専各さんが、どういったところに注目してやってるんですかとか、また、今後、次の小田さんの話にも関係するが、まあ、各学校さんがどういった課題感を持って新任教員研修を作っているのかとか、また苦労されているのか、みたいなところの聞き取りをつぶさにして行くと、おそらく、多分差異化はできるんではないかなというふうに思っている。まだちょっと僕が、余裕が無くて、吉本先生たちのやつまだ見れていないが、ダウンロードはしたよね。（植上）  →資料としては、はい。（丹田）  →だから、それをきっちり読み込むかなと思うけど、ちょっとタイトル見た感じでも、まあなって感じはちょっと思っているので、全然大丈夫かなと思ってるが。（植上）  →項目の一覧はもらって、私も手に入れてるけど、中身までもらっているのか。（岡村）  →冊子を販売してて、それを購入して、良くないけど、はい。（丹田）  →メールで共有してるか。（佐藤）  →多分、研究者メンバーには共有していると思う。かなり前に。（丹田）  →まあパラパラって見たが、これじゃなっていうのは正直にあるが、これじゃなっていうの違う形で、データを示しながら、別に直接的に言う訳じゃなくて、うちの作るテキストは結構役に立ちますよって話を、まあ最終的に言っていきたいな、と。言っていきたい、言っていきたいがために作るんじゃなくて、本当に必要な物を作るっていうスタンスだが。（植上）  →棲み分けができるのは、棲み分けをしていけばいいと思う。（岡村）  →多分そこは大丈夫かなっていう気はしてるが、やっぱ大事なのはそれを得る多ためのデータが、本当にエビデンスを調査で得ていくってことが大事になってくるので、このTCE財団と福専各、そして各学校への聞き取り調査で、外的事項と内的事項、だから必要なデータをとっていくってスタンスで、客観性を明らかにするみたいなことができないが、研究じゃないので。でも、このテキストの必要性は明らかにするっていうスタンスで、今回の全専研さんのこの事業に関してやっていきたいので、客観性は三菱さんに任せるっていう、マクロ調査、いろんなものに関しては任せるっていう形でやっていければなと思っている。（植上）  →TCE財団は、その各13の都道府県の新任教員研修の利用した資料を全部持ってますって言っていたか。（岡村）  →そういうふうに、ミーティングの中では言っていた。あの決算、生産する時に上げてもらってるっていう。（丹田）  →私10何年もあそこで委員やってて1度も見たことない。ちょっと見せてもらおう。来月あるから。（岡村）  →この新任教員の制度は、私が市ヶ谷にいる時に作った制度。で、それを菊田が平成7年だか8年だかに、変更してってこと。で、僕は前からやってた時は、補助金が900万円。900万円というのは、ご承知の通り、委託事業を最低金額。だから、例えばオリンピックを誘致しようという時に、準備委員会っていうのを作って、これも全部文科省が900万円から作る。で、そこから伸ばしていくっていう形で、逆に言うと、現状900万円というのはもうオンザエッジ。もういらないんじゃない、と国が言うギリギリのところで、今、何とか運用していて、今の売上が400って聞いたので、まずいなっていう感じで思っていて。私がやってた時には、売上が4500万ぐらいで、で900しかなかったが、最終的には2500ぐらいまで上がって。要するに都道府県の方にお金がないところに返してあげるために、教員認定制度と準教員認定制度という紙を売るっていう仕組みをつくって、で足りないところにお金を返してあげるっていう形にしてた。これもう言い出しちゃったらとまんなくなるから、逆に聞いてよってことなんだが、私としてこれは考えておいてくださいっていうのは、その現状やってる13都道府県については、それなりに継続性を担保しながら何かやってるんだと思う。でもやってるんだけど、この補助金使ってないところっていうのは、絶対に見てくださいっていうふうに僕は思っている。この人たちっていうのは、私たちは都道府県の認可の学校なので、都道府県の県知事の教員指定の方が重要なんだっていう都道府県。で、その代表なのが北海道であり、大阪であり、みたいなところ。だから北海道なんか4000人とか5000人とか集めてる研修をやってるし、でそこのところに道自治体から3000万ぐらいのお金をもらってるっていう制度になっている。で、そこに私も営業に行ったが、やっぱりもうすでにその当時、道知事からものが出ているのに、要するに国が要はあんたたち認可取りしてないのに、そんな制度をかませても意味ないじゃんって言われた感じ。 だから逆に言うと、その北海道であるとか、そういう所っていうのは、自分たちのエリアの中で必要としている人たちの育成をしている。だから、その現状ある13都道府県っていうのは、はっきり言うと、東専各がやっていた48時間をベースに、これがモデルプログラムですよってことで、だから、当時は教育心理学であるとか、専修学校概論であるとか、教育制度論みたいな話っていうのを並べて、こういう感じでやってくださいと。もしなければ、東専各に教材ありますから、1冊3000円で買ってくださいみたいなことをやってた。でも、それに乗ってないってことは、自分たちの独自の運営ができている。で、それともう1つは、もう全然人が足りなくてできないかっていうところ。で、当時人が足りなくてできなくなっちゃった都道府県っていうのは、都道府県の会長が服飾の学校であった地域。これが全部潰れていった。で、それから社団化できてないエリア。これが全部潰れて行ったっていう感じのこと。なので、その辺の昭和52年ぐらいから60年の時に1回、制度がたち上がり、で、そこから菊田さんが、確か平成5年だか7年だかに1回規定を変えて、今に至っている状況なので、その辺の歴史的経緯をもししっかりと把握して前に行くんだとすれば、絶対に菊田さんを入れてくださいって感じ。（飯塚）  →承知した。（植上）  →じゃないと話せないんじゃない。（岡村）  →話せないと思う。原田は要するに元々財団の担当者なかったし、で、藤井君もここのところ担当になったばっかりっていう状況だから。あともう1つちょっと新任教員研修と違うんだけど、僕らが新任教員研修やってた時にもっと他の物がいっぱいついた。で、ついたのは、まず校長教頭研修っていう要するに管理者研修、これも補助事業だった。で、それから、情報処理教員が絶対的に足りないっていうことで、情報処理教員の単独の補助事業の予算もついた。それから専修学校はいろいろな研究が必要だろうということで、研究奨励事業、という事業があった。それから国内派遣研修事業、それから海外派遣研修事業、この辺までが僕がやってた事業。で今、現状、何がどこまで残ってるのか知らないけど、それを全部あわせて5000万ぐらいな予算をやってたが、それでなってきちゃった経緯っていうのがなにか理由があると思う。だから、もっと専修学校は研究的にいろんなことをやっていかなきゃいけないんだっていうふうに、国が初めに言ってた。で、もう、本当にそういう研究事業について非常に強く奨励していたが。（飯塚）  →なかなか申請が出ない。一応、私、審査員なんだけど。（岡村）  →なるほど、分かった。今、本当に飯塚さんからいただいたご意見、すごくありがたいなと思う。やっぱり北海道、大阪については来年度、ちょっとまた計画の中に入れ込ませて、予算とか可能でしたら。（植上）  →だからその辺は、多分ちょっと市ヶ谷の人間たちが知ってるかどうかわからないが、13じゃないところのほうが、結構、地域に、ここのエリアでこういう人間が必要だっていう制度があると思う。（飯塚）  →そう考えると北海道さんがものすごく重要ってこと。（佐藤）  →北海道は結構あると思うし、それから僕なんかがしたのは静岡とかね、静岡融合させたけど、はい。（飯塚）  →その辺、特に内容面でやっぱり参考にしたりする。（植上）  →そうそう、内容面で、結構そのエリア総合性であるとか、そのエリアが職業教育をどういうふうに捉えてんだみたいな話だったりとかっていうのが、なんか表に出てくればいいかなっていう。だから財団に行くときには、あの人たちは交付団体なので、お金を交付するという役割であって、要するに教育の中身までって、プログラムで48個をやってください、そうすればお金出しますよっていう類の人たちなので。あと内容的にはやっぱりやってるところが自分たちのエリアに属してやってやるっていうことだと思うので。（飯塚）  →わかった。では、ちょっとその辺を。（植上）  →13の中では、沖縄が結構お金はかけている。去年は15人に対して100万単位で、赤字を出しているけど、やってるというところがあって。違う予算に流れていると思う。（岡村）  →そう、あそこは、ちょっと特別な予算がたくさんあるので。そうそう、やっぱり米軍を置くってことは、ね、成底さん。（飯塚）  ・1点質問いいか。新任教員の研修を考えていくっていう多分話だと思うが、そもそもじゃあ新人とか中堅とか管理者とかいうそのキャリアパスっていうのがちゃんと統一されてるか。多分、キャリアパスがあって、そこの中で、そのキャリアパスについてどんな研修しますっていうのがあると思う。じゃあ、それが例えばそのTCE財団とか、あのいろんなところでやってる研修がどれに当てはまるのか、そこの中でできてないのはどうするのか、で、そのキャリアパスの優先順位つけてまずやるべきもの、これは置いといて、学校でやってもらっていいですよみたいな。なんかそんな仕訳をしていった方がすごくわかりやすいようなアウトプットになるんじゃないかなと、今ちょっとお聞きしてて感じた。もしそれができてたら、もうそれでいいと思うが。（林）  →いや、本当に先生の言う通りかなというふうに思っていて。どこまで報告書でいうかはちょっとおくが、率直にTCE財団の今の構えを見ると、キャリアパスはあんまり作れてないなって言うところが、ほんとにパッチワークだったもんね、初めにあった新任研修があって、そのところに中堅とかいろいろ足りないもの、ポンポンポンポン入れていくっていう形で、なんとか作って形だよね。（植上）  →そう、グランドデザイン全然作らないので。植上先生が言う通りでパッチワークっていう話。かつ財団のポジションって、要するに交付団体だから、中身までは入っていかない。それよりもいろんな都道府県でやりたいって言った時にお金が引っ張れるようにっていう感じの役割。（飯塚）  →今のお話は、僕はこれから言われる学校調査のときにその質問が重要だなと思いながら、財団にというよりは。次の小田先生の話の時に、ちょっとお聞きしようかなと僕は思った。学校の時にそこをまずきちっと踏まえた上で、そういった学校での研修がどうなっているかって言うような方がいいかなとは思っている。（松田）  →だから本当に先生方の言う通りだなって思っていて。やっぱりただ、もうその外的事項と、内的事項の話になるが、結局のところ、準公的な専門学校の教員研修というところで、実は充分なキャリアパスっていうものを想定した形での研修っていうのがされてない、不十分であるという話は1つ調査としては出さないといけないっていうふうに思っている。その上で、各学校はどういうプログラムを立てているんだろうかっていうこと。で、先進校の事例と、一方でなかなかできてない事例みたいなものを入れながら、じゃあこういうようなプログラムっていうのは、基本的に先進校以外に広める意味でも、必要なんじゃないかっていう出し方を、していけるといいんじゃないかなと思っている。実際、昨日、三幸学園さんに、インタビューというか行った時に、あそこはもうきっちり作っていた、外部秘ですけどって。作ってたんだけれども、作っているが故に、TCE財団には一切送ってないっていっていた。三幸としてはもう積極的には送ってないし、私たちが知る限り言ってるメンバーいないはずですっていうふうには言っていたので。 それは極端な例だと思うが、その各学校と、TCE財団がやってるものとか、とのある種の見取り図みたいなことを作りながら、新任教員においてはここがポイントですよっていう着地をするための調査設計をしていきたいきたいなと思っている次第。 ただ、本当に先生方が言うように、学校によってもキャリアパスの作り方、また採用戦略とかがやっぱ違うので、その辺を次の小田さんの話になるが、聞ければいいかなと思う。ちなみに三幸学園はめちゃくちゃ変だったよね。教員には研修ほとんど作っていなかった、職員。（植上）  →なるほど、教員。そういうコンセプトからね、足立と三幸は。（岡村）  →教員はもう研修はほとんどしないで、幹部職員3割の幹部職員にガッツリと研修プログラムを作つっていう作り方で、基本はマネジメントの研修で、プラスアルファのクラス担任とかの教育研修を入れていくって作りなので、ほかの専門学校一切参考にならないわけ。そんな形だけど、でもすごい面白かった。（植上）  →面白い。だから、いわゆるその新人、中堅、管理職っていうそういうモデルなのかっていうところ自体から、やっぱり問い直さないと。（佐藤）  →昔ながら、昔ながらというか、日本型雇用的な、むしろキャリアパスを作っている感じがしていた。本当に1年ごとにランクを作っていて、それごとの研修プログラムをパンパンパンって作って。（植上）  →まあ、企業研修みたいな感じ。（佐藤）  →そう、企業研修。（植上）  →職階別研修みたい。（佐藤）  →まさに職階別だった。（植上）  →キャリアパスがまとまると、連続性とか体系とかが多分できてくると思う。これがないから、この連続性も体系性も無いというような話だと、ここがリンクしてくる話だと僕は思っている。（松田）  →さっき飯塚さんが言われたけど、TCE財団ってやっぱり、いかに執行するかっていう事務方の集まりなので、そのナレッジの部分をするのは学校関係者の方を集めるから、そちらの方でやってね、となる、だから委員会を作る。だから私が平成10年かなんか、多分さっき言われたように、新任教員研修はこう変えるよ、変えたいんだけども、この次どうするのって、いうと、ないね、じゃあ中堅作ろうか、みたいな感じでやらんっていう話、で言われたのが最初。それから開発して今作ってるけど、キャリアパスは考えた。だけど2800校を見てくださいよ、と。それは麻生塾さんとか新潟とかがある中で、1個、本当にうちが今、今回対象としてるような学校とみたらあらへんよ、と、フラットよ。 キャリアパスって言ったって話。だからそれを、キャリアパスっていうふうに言うと、難しいので、もう内的な部分の質の部分をどう蓄えていくかっていうようなパスにして行かないと、快適なキャリアパスを描いたって、そんな世界はないんだっていう。（岡村）  →その専門学校って、やっぱりその大規模もあれば中小ある。そうなると、そのキャリアパスっていうその私のキャリアパスって言葉の使い方が不適切だったと思うが、要は専門学校で必要な教育力とか、そういうのが多分コアとして絶対にあるはず。そういうのをまず作っていって、で、それでその外部でやってる研修があったら、さらにそれを取り入れることで良くなると思えば、学校が取り入れればいいから、そのミニマムなやつをまずやっぱりちゃんと揃えないと、多分みんな言ってることがみんなバラバラになるのかなと。（林）  →その通り。TCE財団でも我々が作るのには開発に限界あるんだから、全部作るんじゃなくて、やってるところをちゃんとそれを認定するようなシステムにしましょうよって言って案まで出した。実はそれ作ってたんだけど、一緒になってやってた事務方の事務次長が辞めちゃったし、結局、市場化（？）してる。愚痴を言ってもしょうがないけど、限界あるよね、自分たちで何でも作ろうと思っても。だからいいとこ取りすればいいじゃんって。ICTならICTの専門家の方のところで学んだ方がいいじゃんって。それを単位認定しようぜっていうふうに思ってるのに、なんかこっちで作って、それを固定化して5年10年使う、ICTなんか5年後なんかいらんわって、いう話。そういう発想が無い。（岡村）  →だから僕の時代は48だったが、48時間の中で、ここからここまでいらないんじゃないのみたいな話って結構あって、やっぱり社会にいた人間が教壇に立ちましょうという話になったときに、まず青年心理学が分からないから、要するに企業にいた人間がいきなり教壇に立っちゃうと、ちょっとこういう言い方は不適切かもしれないけど、みんな馬鹿に見えちゃう。自分がクビになったのに、なんでこんなこと分かんないのみたいな感じで思っちゃうみたいな。そういう錯覚になっちゃって、そうすると、心理的に調和がとれなくなっちゃうので、だから青年心理学みたいな、子どもたちの立場になった気持ちの変遷を見て行きましょう、みたいな科目っていうのは、誰が立っても必要だよね、みたいなところで、コアとしてだいたい12とか24でいいんじゃないの、と。で、それを切り売りしたらどうだ、みたいな話があって。結構、文科省と詰めてたんですけども、もう1回48で、ってしちゃったから、補助金出すには48必要だ、みたいな話になっていて。じゃあ48必要だっていうことになるんだったらば、要するに10分の1じゃなくて10分の10にしてくれっていう交渉とかやったけど、そうすればね、比較的、要するに、ただで研修を受けられる状態になるっていうことで、結構出入りが上手くいったんじゃないかなと思うけど、なかなかやっぱりその辺の交渉がうまくいかない。ネックになったのは、大学の中にある研修システムであったりとか、それから科研費であったりとかいうのがネックになって、でもこれが上限ですからみたいなこと言われてしまう。（飯塚）  →もう1個、教育の質向上とは別に、キャリアパスというのは、やはり辞めていく、将来的なことも含めた上で、やっぱりキャリアパスを作っておかないと、やはり退職になるので。せっかく良い教員が途中で退職になる、と。そういったものの意味合いがあるのかなと、教育の質向上とはちょっと違うところで。その中でこう研修をどうやっていくかっていうような研修を作っていかないとかなと。それも踏まえた案があったのかなというふうに思った。せっかくの教員が辞めていくっていうのは。（松田）  →やっぱり、特に新人の方々にとってはキャリアイメージを持ってもらうっていうのはすごく大事なことだと思うが、本当はそれをテキストにもぐっと入れ込んでいきたいなというふうに思っているが、このキャリアイメージを実は作っていくっていう研修が、少なくともTCE財団の中にそんなに入り込んで無いかなっていうふうに思うので、ちょっとここはかなり意識して作っていきたいなというふうに思っている。（植上）  ３．具体的な調査計画・質問項目について②：専門学校へのインタビュー調査（小田）  ・配布資料を基に説明。（小田）  ―――――――――――補足・意見交換等――――  ・この学校調査に関しても、三菱総研に関しては、三幸学園、また慈恵、そしてまた確か三菱総研さんの方から麻生さんに依頼が来てるんじゃないか、来ているか。（植上）  →私から林さんに依頼した。（岡村）  →その件なら承知している。直接、まだまだ文章が正式に来てないだけで。（林）  →そちらのほうもよろしくお願いします。三菱総研さんの方で、大規模学園の調査ということは設計しているので、その辺のデータはもちろん私もちょっとインタビューに加わりながら、聞いていこうかなというふうに思っているが、こちらのところでは、委員に加わっていただいている法人学校の先生方に、ぜひあの学校毎に、先ほど言ったキャリアパスの話、そしてキャリアパスの想定の話。そしてその中で研修の組み立て方の話、学内で研修と学外の研修の利用の仕方という外的な側面。さらには学校でやられている新任教員研修が、内的なアイデアについて聞きたいというのが主旨になっているので、そういった形で小田（茜）さんには質問を作っていただいている所。（植上）  ・インタビューの際だが、これは事前に質問こういうのしますよっていうふうに、ペーパーかなにかで担当者の方に渡すのか、それともいきなりこれですよっていうことで聞くっていう、どちらの方法で今検討しているかを教えてほしい。（佐藤（善））  →事前にデータ等で送らせてもらうように考えている。そしてその当日できないということではなくて、事前に見てもらおうと考えている。（小田）  →わかった。私も実際に研修担当してるので、これいきなり全部当日は厳しいかなと思ったので、事前にもらった上で、こちら側も資料準備したり、なんていうのがあるので。（佐藤（善））  ・どちらかというと、本当に自分のところに持っていったときに、やってるのかなって心配になってるっていうところが1番の問題だが、一応ちょっとまだ打診をしてないので、打診した上で、こういう質問がきますいうところで話を進めていきたいなと思っている。（水田）  ・視察対象は確定しているか。（飯塚）  →今日確定したい、今日お願いに。（植上）  →あまり総研と被るっていうのは。（飯塚）  →総研と被るのは、麻生さんと、三幸。三幸は別に行かなくてもいいけど。（植上）  →いや、そうじゃなくても、そういうところって疲れちゃうので。なんでここでもやってんのに、こっちでもやってるのみたいな話で、疲れちゃって、あんま。聞くことが全く違うんだたらちょっと別だが。（飯塚）  →では、三幸は外す。麻生さんはむしろこっちを中心にやりたいっていうふうに三菱総研に言っている。（植上）  →なるほど。（飯塚）  →むしろ私たちで麻生さんをやらせてくださいっていうふうに三菱総研には、こっちの麻生さんのデータは、こっちが優先的に使いたいのでっていう話は、藪本さんには言っている。よろしくお願いします。（植上）  →KBCさんは分析済とみているのか。（飯塚）  →KBCさんは忘れていてた。いや成底先生に聞けたら、ぜひ行きたいが、いいのか。というか、行きたい、考えてみたら。（植上）  →やっぱ新任教員のクレドがあるから。（飯塚）  →そうだ、行かないと。KBCいいか。（植上）  →まあ、はい、可能。（成底）  →確かに。KBCさんだったら、今までたくさんレクチャーしてもらっているから、すごい行きやすいし、私たちも講師をやらせてもらった経験もあるので、むしろ。すいません、成底先生が委員長だったので、委員という位置づけが僕の頭の中になかったので、成底先生のところに聞いていいっていうちょっと選択肢がなかったので、外してた次第。むしろKBCさん。（植上）  →これは何校いくのか。（岡村）  →そこは、ちょっと相談で。文科省に出してるのは6校程度で出していて、予算が6校程度。これ飯塚さんに相談だが、5校にしてもらって、その代わり福専各にプラス1校って。TCE財団調査が1回という予算を立てていて、学校調査が6回と立てているが、福専各にはどうしても行きたいので、福専各は、僕はただだが、丹田君が大分から来る旅費が欲しいので。福専各とTCE財団で2回、学校で5回、計7回で何とかならないかなと思ってるが。（植上）  →全然、構わないと思うし、逆に言うと、増える分には構わない。（飯塚）  →あとは予算を、ちゃんと縮減をどこかでするれば。（岡村）  →今のあのお話だと、YICさんと麻生さんには、ぜひ改めてお願いしたい。国際総合学園にもお願いしたいし、KBCさん、また工学院さんにもお願いして、5校で、お願いできればなぁっていうふうなのが、思っている。6校行かなきゃいけないってなったら、三幸学園かなと思う。5校でいいか。（植上）  →5校というか、個人的にはうち聞いてもなっていうのは自分の中ではあって。（岡村）  →5校というと、YICと麻生さんと国際総合学園と工学院と、それから成底さんのところで5ってことか。（飯塚）  →はい。YICはだめか、小田（政）先生のところ。（植上）  →新人って言われると、新人はあんまり。（小田（政））  →いないからね。（岡村）  →普通のYIC研修なら、いいけど、それでいいか。（小田（政））  →大したことやってないけど。（岡村）  →そう､いいのかなって。（小田（政））  →小田（茜）さん、どうか。（植上）  →新人研修を今、現状されてないという理解でいいのか。（小田（茜））  →新人の教員として特定してやっていない。教職員という位置づけで、理念共有とか基本的なところはやっている。（岡村）  →ただ、新人研修も聞きたいが、キャリアパスの話みたいなこともすごく大事で。で、その中でどういう研修の位置づけ、組み立てをされてるのかっていうこともすごく大事になってくるので、そこでの課題感みたいなものを聞けるのもすごく大事かなと思うので、ぜひYIC入れさせてもらえればと思う。（植上）  →さっき、議論出た北海道とか大阪とか静岡の話は、一旦今は福岡に絞るって話になっていたか。（佐藤（昭））  →北海道とか入れちゃうと、現実問題、無理。（植上）  →まあ、そうか。（佐藤（昭））  →人的に無理。（植上）  →そうかそうか。（佐藤（昭））  ・この資質能力の理念図、概念図じゃなくて理念図だが、2点あって、1つは大きなところで、汎用的な基礎的な社会人としてというか、そこの資質能力というのは全く見なくていいのかというのが1つ。自己成長とか自己管理能力だったりとか、情報収集、分析とかっていうか、最近で言ったらデジタルスキルであったりとか、そういったものもやっぱり資質としては、今から必要やなと思っているけど、それが全くここの領域に入ってないと、抜けてもいいのって、思ってないけど、思われるかなっていうのが1つ。それから職業人としての価値観っていうのと、教員としての価値観っていう、この価値2つ、2つの領域にあるが、これどう区別するのってあらためて聞かれると、どこがどう違うっていうところは、新任の中でなかなか考えづらいだろうな、と。やってきて、多分、見えてくることなのかななんてはちょっと思ったりはしている。（岡村）  →そう思う。ちょっと今答えづらいので。（植上）  →はい、宿題で。（岡村）  ・2番の教育領域における専門家としての側面、もう少しあの具体的には示した方がわかりやすいかなと思う。①、②それぞれどういう具体的にどういうものかというふうに。（松田）  →承知した。これがパッと見で示すものだが、この赤と青のところ、もう少し具体的なところっていうところが示すようなものを、小田さんに作ってもらおう。小田さん作れるかな、僕かな、作ってくる。（植上）  →これ大項目なので、もう少しブレイクダウンしてやらないと、答える方がどれを答えていいのか、多分、すごくそこでブレが出るのかなと思った。（林）  →逆にどういったものを聞きたいかっていうのがわかれば、それができてくると思う。（松田）  →ちょっとこの辺、まだこれは多分、時間が足りなかったので、これ持ってきているが、聞きに行くときには、もう少し先生方とか、担当者の方にわかりやすいような形で、図を作るような感じで工夫する。ありがとうございます。また、岡村先生が言ってもらった社会人基礎力のところとかもこの図に。この図を別に死守するわけでは全然つもりはないので、ちょっと違う形で作り直して入れ込もうかなというふうに思う。これはやっぱりかなり理念図なので。ちょっと違う形で作り直してくる。（植上）  ・小田（政）先生、どうか。（植上）  →いや、もう本当、言っていた通りで、もう少しこう具体的な、例えばっていうのを入れてもらえると。特にあのさっき言った、小田（茜）先生も言っていたが、4－（3）－②、価値観やアイデンティティのとこで、先ほど岡村の方からも出たが、何がどう違うのか、混乱をしてしまうので。中堅ぐらいだったらいいが、新人だと分からないので。（小田（政））  →ちょっとこのあたり、まだこなれてないので、もうちょっとわかりやすいような、まだ固い概念で作っているので。ちょっとその辺わかりやすい文章にしてくる。（植上）  ・もう1点いいか。教育領域のところで、③ところに人材像を設定するのがあるが、教育課程編成委員会の知識・技能ということで規定されているが、私やっぱり人材像設定っていうのは社会からの要請だと思う。だから、その社会がどんなその知識・技術を持ってる人を求めてるかということがだいたいスタートであるべきだと思ってて。その中で作ったところで、じゃあそれが実際、今あっているのかどうなのかっていうのを、職業実践専門課程の中で、教育課程編成委員会の中で確認したりとか、改善をしていく流れだと思う。から、そこのスタートのところを同じ温度感で聞かないと、それがちょっとブレてしまうのかなというふうに思った。（林）  →ありがとうございます。今、ちょっとすぐさまお答えできないが、ちょっと考える。一応、赤のところ、これは理念図だが、あまり理念図を説明しまくってもしょうがないけど、一応、理念図の青があって、赤が職業的な知識をもとに教育に変換するっていう能力だと思う。今、林先生が言われてたことも、返還する前の知識っていうのがそもそも必要ですよねと、その社会のニーズとかってのは、本当にその通りだと思っていて。ただ一方で、この社会のニーズを実際に、専門学校のプログラムをして行くとか、人材像設定して行くっていうところには、やっぱりまた特殊な能力が必要だろうっていうふうに思っていて。そこが赤とか紫の能力として、多分、言語化できるんだろうなというふうに思ってるが、まだまだ抽象的すぎるっていうことと、これだけの図だと本当に分かりづらいので、ちょっとこのあたり必要な限りで工夫をしていきたいと思う。ありがとうございます。（植上）  ・その他先生方、どうか。成底先生もこういう方向性でいいか。（植上）  →大丈夫。（成底）  →じゃあこういった質問項目、持ってKBCにも行かせてもらえればと思うので。よろしくお願いします。（植上）  →承知した。（成底）  →ありがとうございます。（植上）  →対応する職員としては先程あったように、研修、学園内で研修の企画、運営を担当している職員が対象ということで。（成底）  →そう。特に、こういった質問に対して、少し答えてもらえるような方を紹介してもらえると、非常にありがたいなというふうに思う。よろしくお願いします。（植上）  →承知した。飯塚さん、私じゃダメか。委員がヒアリング対象になるっていうのは。（成底）  →そう、委員はあまり良くない。なんで委員なのに、わざわざ視察に行くのって話になってしまうので。だから成底さんの横に誰が置いといておく形で。（飯塚）  →承知した。（成底）  →内容ではないけど、いいか。事務的なことだが、視察は3人で行ってほしい。（飯塚）  →3人でいいのか。予算が、文科省への企画書を見たら2×なんとかってなってたから、2人にしたが。（植上）  →これ全部3人で今設定されている。3で設計している。例えば、郡山には博多から2人と東京から1人という話なので現状のままでいくと、えらい勢いでお金が持ってしまう感じなので。なので、3人で設計してほしい。（飯塚）  →例えば、研究者グループから2人、プラス1名を委員の先生方に。（植上）  →それは構わない。委員の先生方でも良いし、僕たちも事務局としてついて行っても良いし、日程が合えば。とにかくちょっと3人は確保したい感じ。（飯塚）  →承知した。Slackか何かで、今後、日程調整して。（植上）  →決まれば、それを公開してもらって。（飯塚）  →という形でいいか。ありがとうございます。（植上）  ・あと、ものすごく細かいことだが、小田さんに伝えてほしくて、工学院という表現すごく良くなくて。東京に工学院で出すと、手紙が工学院大学に行くのか、東京工学院に行くのか、日本工学院に行くのかって喧嘩になってしまう。工学院じゃなくて日本工学院にしてほしいと思う。（飯塚）  →正確に言うと、日本工学院も3つになってしまう。日本工学院専門学校か、日本工学院八王子専門学校か、北海道多分やらないと思うので、厳密に言うと、その正式名称で連名にしてもらうのが1番いいかなと思う。そこの2つが、基本的に共同でいろいろやってるので、どっちか答えたらどっちの部分も答えられるって話になると思うので。（水田）  →ありがとうございます。ではそれを伝える。今後、担当者が日程調整をそれぞれの委員の先生方とともにして行きたいと思うので、先生方どうぞよろしくお願いします。まだKBCの担当者は決まっていないが、後日、小田さんと相談して決めたいなというふうに思うので、よろしくお願いします。日程調整が終わった段階で、他の先生方で調査に参加できる方っていうことで募るので、先ほど飯塚さんが言っていたように、3名以上、4名になってもいいのか。（植上）  →とりあえずまず3名で。（飯塚）  →はい、まずは3名ということで。是非、研究者以外の先生方にも行ってもらった方が、むしろこういった視点大事なんじゃないかっていうところがあると思うので、そのあたりも、お忙しいと思うが、手を挙げていただけるとありがたいなというふうに考えている。では、こういった形であの日程調整を担当者から、個別に調整が行くと思うが、どうぞよろしくお願いします。（植上）  ・さっきの学校の方で確認だが、三幸さんとか日本工学院さんとか、大学がある。FD・SDは、当然ながら大学やってるわけなので、その辺との互換とか予算のこととか、正直、色分けされているのかどうかとかっていう。人員が別れているのは分かってるが、でも、私だったら大学のそのFDに入れるよなって、共有だったら、、普通に考えると思う。その辺りどうなんだろう、なんて思っていて。三幸はグループで4000人ぐらいいるから。（岡村）  →三幸は全部ごちゃってなっていると言っていた。（植上）  →だよね、そう思う。もともと医療事務とか保育とか、あの辺からやってるから。そうなんだ。それをどういうふうにフィルターをかけるというか、その辺を前提にした見方をしないと、それを見ちゃうと、もう大学はそりゃそうだよねって感じがあって、ちょっと聞いてて思った。専門学校単独の学校で、麻生塾とかそういうのは違うけど、新潟もやっぱり大学あって、管理職はみんな事業創造大学院にみんな入れるみたいなことする。それとやっぱり一緒にはなかなかしづらいよねと思った。それを理想と言われてしまうと、端から90何パーセントが学校は無理よ、となってしまう。ちょっとそこは気になっている。調査することは一向にかまわないので。（岡村）  →承知した。頭に入れておく。ありがとうございます。  ４．次回の委員会の日程  ・11月16日　15：00～ |
| 配布資料 |  |

以上